
 書 評

Charles B. Schmitt: *Cicero Scepticus, A Study of the
Influence of the Academica in the Renaissance*

Archives Internationales d'Histoire des Idées 52, 1972.

pp. X+214, Martinus Nijhoff

野 町 啓

キケロ（以下 C. と略記）は、本書の書名の一部をなす *scepticus* にとどまらず、弁論家・哲学者・政治家等々多様性に富んだ人物であり、それぞれの側面において、例えば *Reallexikon f. Antike u. Christentum* の C. Becker の執筆にかかわる <Cicero> の項目が示すように、クリスト教教父と関連を有し、またこれとあわせて、いわゆる *artes liberales* の系譜に彼が占める比重からして、中世・ルネッサンスを経て近世初頭に至る間、彼が大きな影響を及ぼしてきたであろうことは容易に想像されうるし、またそれはすでに T. Zielinski の *Cicero im Wandel d. Zeit* (1897) の示すところでもある。しかし Zielinski の場合、古代からフランス革命までの C. の影響が、広いパースペクティブの下にたしか網羅的にフォローされてはいるが、かえってそのために文献上の実証的裏づけは十分とはいえず、また個々の事例についてもかなり強引な解釈が目立つ（例えば アウグスティヌス—以下 A. と略記—の『告白』第Ⅲ巻第4章に関する叙述 cf. SS. 116 sqq.）。Zielinski の同書の刊行からほど遠くない1909年出版された *Die antike Kunstprosa vom VI. Jahrhundert v. Chr. bis in d. Zeit d. Renaissance* (S. 708, Anm. 1) の中で、E. Norden が、Geschichte Ciceros in Mittelalter といった研究がその必要性にもかかわらずこれまでなされていないことを指摘しているが、この状況は、M. Testard が *Saint Augustin et Cicéron* (1958, I. p. 219) において同主旨の提言をしていることが示すように、現在においてもさほどかわってはいないように思われる。今後 H. Hagendahl の *Augustine*

and the Latin Classics (1967) のような研究が、とりわけ C. を中心に、例えば〈Cicero and Boethius〉といった問題意識の下に、個々の教父なり思想家についてなされるべきであって (Boethius についてこのような研究の必要性は Testard の前掲書 I, p. 223, n. 2 においても力説されている), その意味において Schmitt の本書は、このような未開拓の分野を拓くための基礎的作業の試みとして注目すべき意義をもつものといえる。

著者 Schmitt には、すでに、‘Henry of Ghent, Duns Scotus and Gianfrancesco Pico on Illumination’ (*Medieval Studies*, 25: 1963, 231–58); *Gianfrancesco Pico della Mirandola* (1469–1533) *and His Critique of Aristotle* (1967); ‘Giulio Castellani (1528–1586): A Sixteenth Century Opponent of Scepticism’ (*Journal of History of Ideas*, 5: 1967, 15–79) 等の研究があり、また本書につづく著作として〈Scepticus〉という語の各国語における意味の変遷 (ちなみに本書によると、すでに Aulus Gellius の *Noctes Atticae* XI, 4, 6 に写本によってはこの語の使用がみとめられるとはいえ、この語がラテン語として定着し一般化するのには、1430年 Ambrogio Traversi による *Vita Pyrrhoni* を含む Diogenes Laertius のラテン訳《*Vitae et sententiae philosophorum*》がローマにおいて刊行されて以来だという。同じく本書によると、Diogenes Laertius の同書については、G. Steiner がその *Catalogus Translationum et Commentariorum* の刊行を準備中とのことである), ならびに Sextus Empiricus の *Pyrrhoniatarum hypotyposeon libri III* (なお同書の最初のラテン訳は1562年かの Henricus Stephanus によりなされる) の伝承史の公刊が本書において予告されていることからうかがえるように、古代・中世を経てルネッサンスからとりわけ16世紀ならびに17世紀初頭に至る scepticism の展開に著者の主たる関心があるように考えられる。そしてこのことは、本書の副題や、以下のような本書の構成自体にも反映されているといえよう。すなわち、chap. I-Introduction; chap. II-The *Academica* and Its Influence and Distribution in Antiquity and the Middle Age; chap. III-The *Academica* in the Renaissance; chap. IV-The *Academica* at Paris in the Middle of the Sixteenth Century: Talon, Galland, and the others; chap. V-Giulio Castellani and the *Academica*; chap. VI-Johannes Rosa and His Commentary on the *Academica* (ちなみに Rosa の同書はドイツ語圏における最初の『アカデミカ』

—以下 *Ac.* と略記一の註解だという *In reliquas Academicorum quaestionum M. Tulli Ciceronis et ejusdem quinque libros de finibus Johannis Rosae commentarius*, 1571 Francofurti ad Moenum); chap. VII- Summary and Conclusions; Appendix A: Francesco Patrizi's Letters on the *Academica* to Achille Petrucci; Appendix B: Daniel Barbaro's Paraphrase on the *Academica*:

著者は、C. の *Ac.* の Fortuna を、(1) diffusion, (2) influence, (3) transformation の三面からたどることを本書において意図しているが、実際上 (1) の論点に重点がおかれているとあってよく、C. の同書の *Catalogus translationum et commentariorum* をまとめ、R. Sabbadini の *Storia del Ciceronismo* (1885) 等の業績を継承し、かつ補完することに本書の中心目的がおかれているようにみられ、またその際著者の究極の関心は16世紀中葉における Scepticism の復興にあるといえよう。16世紀は、先にもみたように、Sextus Empiricus の最初のラテン訳が刊行され、C. の *Ac.* についてもさまざまな校本や註解が集中的とあってよいほどに刊行され (本書の Bibliography には10点があげられている)、著者のいうように A. の *Contra Academicos* 以来初めて C. の同書が注目され、積極的な意味で評価され影響力をもつようになった世紀である。この場合、とりわけ *Ac.* 復興にあたっての有力な機運を、著者は、P. Ramus (1515-1572) ならびに Omer Talon (c. 1510-1562) を中心とする、アリストテレスのスコラ的 Version を主たる内容とする Collège Royale の在来のカリキュラム改革を目ざすグループの動向に求めている。これらの人々は、伝統的な dogmatism の対極をなすものとして、C. の同書に提示されているようなアカデミア派の scepticism に着目し、それを有力な典拠にしつつその再解釈を通して *libertas philosophandi* の精神を提唱し涵養しようとする。そしてこのグループは、著者によれば、旧来の Académie の在り方に対し、C. のひそみにならって Nouveaux Académicien と自称したというのである。しかし、scepticism は、その本質上、著者も指摘しているように ideologically neutral doctrine (p. 25) であり、さまざまな観点から援用される可能性をもち、したがって16世紀において *Ac.* が注目されるようになる契機に関しても、いわゆる Ramists の動向とはまた別の要因も考えられよう。たとえば *Ac.* にみられる懐疑主義者としてのプラトン像が (editio posterior いわゆる *Academica* の末尾)、16世紀においてとりわけ Fideism の観点から再評価さ

れていく過程等も当然考慮に入れる必要があろう (cf. E. N. Tigerstedt, *The Decline and Fall of the Neoplatonic Interpretation of Plato*, 1974, esp. pp. 31 sqq. 及び『西洋古典学研究』XXVI 号所収筆者による同書の書評参照)。以下本誌の性格上, C. の *Ac.* の古代から中世に至るフォルツーナを本書の内容に即しつつ紹介することにした。なおこの場合, 本書では scepticism の系譜についても C. の *Ac.* と関連のある範囲内においてのみ論及がなされており, 例えば Tertullianus の *De anima* (17) にみられる感覚の信憑性をめぐる議論についても, その典拠が Soranus を介して Sextus Empiricus に求められることを理由に一応言及されているにすぎず, また14世紀における Jean Buridan, William of Autrecourt, William of Ockham 等における nominalistic な傾向のうちにかがわれる sceptical な要素 (これに対し 'sceptical' を適用することの是非に関しては A. Maier, *Das Problem d. Evidenz in d. Philosophie d. 14. Jahr. Scholastik*, 38, 1963 の批判がある) や, Al-Ghazzali (1059-1111), Jehuda Halevi (c. 1085-1141) にみられる著者のいう Hebrew and Arabic anti-intellectual and quasi-sceptical tradition についても問題の所在の指摘と今後の検討の必要性の提起の範囲内にとどめられている。

Ac. は, C. の他の著作に比して, 古代から中世にかけて決してポピュラーなものではなかった。例えば中世においても, 12世紀, 著者不明の *Moralium dogma philosophorum* の底本として *De officiis* が想定され, その面での影響をめぐる研究は多々なされてきている (N. F. Nelson, 'Cicero's *De officiis* in christian thought', *Essays and Studies in English and Comparative Studies*, 10, 1933, 59-160; P. Delhaye, 'Une adaptation du *De officiis* au XII^e siècle. *Le moralium dogma philosophorum*', *Recherches de théologie ancienne et médiévale*, 16, 1949, 227-58; 17, 1950, 5-28 等)。同じく12世紀, John of Salisbury が, その *Policraticus sive de nugis curialium et vestigiis philosophorum libri VIII* の第 I 巻プロローグ, ならびに古代の哲学諸派をとりあげている第 VII 巻において, とりわけその *Quod Academici modestiores fuerunt aliis philosophis quos temeritas exceceavit ut darentur in sensu reprobum* というタイトルから示唆されるように, アカデミア派の non-dogmatic position に対し好意的な発言を行なっているが, その典拠は直接 C. の *Ac.* からではなく, むしろ A. に求められると著者は主張する。さらに同様のことは, 13世紀, Henry of Ghent の

Summa についてもいいうると著者はみており、その第1問《*Utrum contingat hominen aliquid scire*》において、たしかに *Ac.* を直接参照しているように思わせる発言が多々みうけられるが、やはり典拠は A. だとされている。写本についても、*Ac. priora* (いわゆる *Lucullus*, 通例 *Ac.* の *liber secundus* とされているもの)、ならびに *Ac. posteriora* (いわゆる *Ac.* であり、通例の *Ac.* の *liber primus* とされているもの) の両者のうち、後者についてはほとんど知られておらず、12世紀と推定される写本が一つ現存するのみであり、中世において C. の同書が言及される場合、ほとんど前者について集中しているというのである(写本の問題については cf. M. Manitius, *Handschriften antiker Autoren in mittelalterlichen Bibliothekskatalogen*, 1935, SS. 19–41)。しかし中世におけるこのような忘却にもかかわらず、*Ac.* は、4世紀、Lactantius, A. の両者により注目され、それを介して例えば John of Salisbury の場合にみられるような影響力をもつのであって、その意味でこの両者は注目に値する。しかも著者によれば、この両者には、scepticism を是認するかいなかをめぐる後世にみられる二つの態度が典型的に示されているというのである。

後世〈Cicero christianus〉(この名称の由来を著者は Gianfrancesco Pico, もしくは Erasmus に求める) と呼ばれる Lactantius の *Ac.* ひいては scepticism に対する観点は、*Divinae institutiones*, ことに古代の哲学諸派がとりあげられているその第三巻(*De falsa sapientia*) に端的に示されている。そこにおいて彼は、真理の究極の源泉である神に発する *sapientia* と哲学者の *scientia* とを区別し、後者がひっきょう *inanis et falsa opinatio* にすぎないと主張する。換言すれば、単に哲学をもってしては、C. の *Ac.* にみられるアカデミア派の人々の主張するように、真理には到達しえないと彼の場合考えられているわけであって、いわば fideistic な観点を展開するにあたって scepticism が是認され援用されていることになる。著者は、Lactantius に対する *Ac.* の直接の影響の例証として *opinio* (cf. *Ac.* I, 42) という語の使用を重視する。しかし例えば A. Wlosok は (*Laktanz u. d. philosophische Gnosis*, 1960), Lactantius にみられるような Offenbarungstheologie と Skepsis との関連づけの原型を Philon (*De fuga et inventione*, 126–139) に求めており、彼の場合も、その典拠としては *Ac.* よりもむしろ『ティマイオス』(28c) における神の不可認識性の主張の Hermetismus による再解釈の系譜(Wlosok はこれを d. afrikanische Pla-

tonismus と呼ぶ, cf. SS. 204 sqq.) との関連を重視しており, この問題は今後検討を要する。

Lactantius においては, scepticism は人間の理性が独力をもってしては真理に到達しえないことを明確に提示している点において是認され, クリست教への一種の propaedeutic としてその存在意義が認められているといえるが, これと対照をなすのが A. であると著者はみる。Contra Academicos にみられる A. の観点からすれば, scepticism は否定し克服されなければならない moles と考えられているからである。著者の A. に対する言及は, すでにこの問題をめぐる歴大な研究の集積があるためか, 比較的簡単な叙述のみにとどまり, 例えば A. の知識の典拠に関しても, Testard (*Ac. priora, posteriora* の双方 cf. *op. cit.*, I, pp. 1209 sq., II, p. 132) と Hagendahl (*Ac. posteriora* のみ, cf. *op. cit.*, p. 498) との対立する二説を並記しているにすぎない。また *Contra Academicos* 第Ⅲ巻の (17, 37 sqq.) 哲学史的展望にみられる, アカデミア派の scepticism は単にうわべだけのことであって, それは〈omnia esse corpora〉と主張してやまないストア派に対抗するための consilium かつ arma であり, この派の人々はプラトンの二世界説を核とする mysteria を秘匿していたという興味ある所説に関する言及なり検討は本書ではなされていない。*Contra Academicos* における A. の scepticism に対する態度は, 著者のみるように単なるその否定と断定するにはいささか問題があり, そこでは, アカデミア派・キケロ・scepticism のそれぞれの観点が三者三様にからみあっており, しかもそのそれぞれに対する A. 自身の態度も必ずしも一貫しているとはいいがたく, 今後 A. 自体の研究においてこの問題は洗いなおしてみる必要がある。また C. 自身についても, たしかに彼は *Ac. posteriora* (*Ac.* I, 43) においては Varro にアルケシラオスの説の加担者と呼びかけさせているが, 彼とアカデミア派そのものとの関連も決して明確だとはいいがたい (P. Boyancé が *Études sur l'humanisme cicéronien* において, この問題の研究の刊行を予告しているが, 筆者は未見である)。

従来 A. と C. との関係が問題とされる場合, アリストテレスの *De philosophia* との関連や, A. の思想発展に対する関心から, 散佚した *Hortensius* にとかく研究の焦点がむけられる傾向がある。しかし著者のいうように, *Ac.* ひいてはそこに提示されているさまざまな scepticism の発想は, 主として A. の *Contra Academicos*

を介して後世に伝承されていくのであり、本書の刊行を契機に、*Ac.* それ自体の内容の分析はいうまでもなく、それと *Contra Academicos* の比較や、またそれを通して本書では十分にふれられていないフォルツーナの第三点、すなわち *Ac.* にみられる scepticism の後代における transformation の問題が、A. についても、さらには Henry of Ghent 等についてなされる必要がある。本書は、Geschichte Ciceros im Mittelalter という Lücke をうめる格好の契機を提供するものといってよく、さまざまな問題は未解決のまま残されているとはいえ、未開拓の分野に一石を投じた意義は多大であるといわねばなるまい。

R. A. Markus: *Saeculum, History and Society in
the Theology of St. Augustine*

Cambridge, 1970. Pp. XII+252

坂 口 昂 吉

本書の著者 R. A. Markus はリヴァプール大学の中世史の首席講師であり、*Studia patristica*, *Studies in Church History* などに秀れた論文を發表している。本書は、アウグスティヌスが歴史、社会、教会を人間の究極的運命とのかかわりにおいて如何に考えていたかを、史料の再検討に基き総合的に考察したものである。方法的特色の第一は、P. Brown のアウグスティヌス伝にみられる如きアフリカの特異な教会事情を充分考慮に入れていることである。だがそれにもまして独自の点は、H. Cox や J. Moltmann らのいわゆる世俗化神学の立場から史料の再構成を行っていることである。

かかる操作の結果、著者はアウグスティヌスを saeculum の神学の先駆者として扱っている。第一にアウグスティヌスは歴史の世俗化を行った。すなわち彼は聖書正典以外のすべての歴史を同質的であり、人間の究極的運命に直接関係ないとみたのである。第二に彼は、ローマ帝国をはじめ国家や社会制度一般を世俗化した。す